

女性の貧困とケア

—発達に不安をもつ子を育てる家族に焦点をあてて—

○北海道大学大学院 保田 真希 (008291)

キーワード： ケア・貧困・二次的依存

1. 研究目的

ケアは不可避なものであるが、その役割を引き受けてケアを行うことは、労働市場や家族内においても不利な立場に置かれやすく、貧困のリスクを高めることが指摘されてきた。このように、貧困の問題を考える上で、ケアの話は切り離すことができない。そこで、本報告は、貧困とケアがどのように関連しているのかを考察していくことを目的とする。今回扱う資料は、地方都市で発達に不安をもつ子を育てる家族に対する聞き取り調査の内容である。

2. 研究の視点および方法**(1) 調査の概要**

本調査は、X 県 Z 市にある子ども発達支援センターを利用している家族 43 世帯に依頼文を配布し、実際に協力を得られた 39 名(女性が 38 名、男性が 1 名)に対して個別に半構造化インタビューを実施した。その際、録音をせずに、聞き取りの内容を記録した。そのため、本報告はこの記録をもとに、結果を整理し、分析していく。本報告は、平成 27 年度公益財団法人 北海道大学クラーク記念財団博士後期課程在学生研究助成(研究代表者：保田真希、題目「女性の貧困とケア役割—家族内の役割分担と社会資源の活用に焦点をあてて—」)を受けて実施した調査の結果の一部である。

(2) 研究の視点

多くの場合、女性の貧困問題が明確に顕在化するのには、女性が世帯主の場合である。例えば、母子世帯や未婚単身女性、離別・死別によって単身となった女性である。一方で、婚姻中は女性の貧困問題を把握しにくい。しかし、先行する研究において、世帯の中の個人に焦点をあてた場合、ケアをする人(その多くが女性)が貧困に陥るリスクが高まるという問題を有していることが指摘されてきた。こうした「世帯内に隠れた貧困」を考えるために、家計調査や家族内の資源配分、夫妻間での権力関係(パワー)などに焦点があてられる。また、先行する研究においては、障害児者のいる世帯は母親が子どものケアに専念することで、収入がシングルインカムによって支えられ、経済的に厳しい状況にあることが明らかにされている。母親の就労を困難にする背景には、乳幼児期の療育、保育場面、学校教育の中で、送迎や付き添いなどを含め、多くの時間をケアに割いていることが挙げ

られている。

そこで、本研究は実際の生活場面におけるケア、特にケア役割の担い方に着目し、ケアと貧困との関連を考えていきたい。ケアニーズが高まれば、ケア役割にあてる時間が増すため、社会資源の利用や人的資源の有無によっても、家族内のケアの配分や働き方に影響すると推察される。そのため、本研究は研究視点として、実際にケア役割を誰が担うのかを規定していくプロセスに着目する。より具体的には、協力者とその配偶者の出身別に「定住型」「Uターン型」「転入型」の3つに分類し、移動タイプによって、ケアの配分やサポートの有無、仕事等にどのような特徴があるのかを検討する。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守している。また、本研究は北海道大学大学院教育学研究院における人間を対象とする研究倫理審査で承認されたものである。聞き取りを始める前に、協力者に対して調査の趣旨や概要、断ってもよいこと、データの取り扱い方法などを記載した資料を提示し、資料に沿って口頭で説明し、データの利用に関する同意を得ている。本研究は、協力者の匿名性の保障と個人情報の保護に基づき、秘匿化をしている。

4. 研究結果

本研究で明らかになったことは、次のとおりである。第1に、男女で経済的資源に偏りがある。第2に、女性が家事や育児などのケア役割を中心に行っていた。子ども発達支援センターや療育機関、病院への付き添いも、主に女性が行っていた。第3に、地域移動のタイプとサポートの有無である。例えば、実家や友人などからのサポートが得られない場合には、夫妻でやりくりをし、常に女性がケア役割に専念していた。

5. 考察

本研究においても、女性が男性に経済的に依存し、ケア役割を担っていた。しかし、ケア役割を担う人が他者に依存することで生活が安定する・維持される状態は脆弱性を帯びている。では、なぜ、女性はジェンダー不平等の状態に置かれ、階層の違いがあっても、誰かに依存してケアを行う状態に置かれるのか。依然として、家族内のケアが家族員の誰か(多くの場合、女性)に固定化される構造が残存していると考えられる。家族内のケアをめぐるのは、家族員がもつ意識や資源などによって規定されるが、その一方で家族を取り巻く社会、すなわち住んでいる地域によっても規定されている。ケアを代替することができなければ、家族の誰かがケアに専念しなければならない。すなわち、「二次的依存」の状態を避けることができない場合がある。この点については、今後の課題として取り組みたい。